

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.14)

### 「わら小屋の中で針をさがす」

・・・Xの悲劇・・・

「かなり上の方に、信じられないような中世風の小さな塔が雲の中に浮き立ち、石造りの城壁、銃眼のついた胸壁、昔の教会のような珍しい尖塔が見え、その先端がどっしりと緑に茂った森の上につきでている」

「Xの悲劇」(エラリー・クイーン作)の中の一節である。

作者による作品のなかでの創造の産物かも知れないが、あたかも、メキシコに数ある世界遺産の遺跡の内の一つ、例えば右の遺跡を目の当たりにして、紹介していると言っても不思議ではない。



世界遺産、カンペチェの遺跡

しかし、今回の報告は、これらについて書き進めるのが目的ではない。「Xの悲劇」の重要な役割の小道具たる、高純度ニコチンを塗った針と、この情景描写から思い起こされる、

メキシコ各地の地名から連想して、「**Buscar una aguja en un pajar**」

(ブスカル ウナ アグハ エン ウン パハール と発音し、直訳は表題のようであるが、日本語の諺に当てはめれば、骨折り損のくたびれ儲けというところだろう)という諺をタイトルに使った。

スペイン語を習い始めた当初、イントネーションや、一部の特殊な字の発音を気にしなければ、多くの単語などを、ローマ字読みでそのまま読んでも、当たらずとも遠からずで相手に伝わり、「日本人にとっては、発音は易しいよ」とよく言われたものだが、そうとばかりも言えず、現在でも頭に引っかかるものがある。

例えば「**X**」の発音は、原則論から言えば、**X**の次に母音が来ると「クス」、子音がくると「ス」と発音するなど本には書いてある。ここで、ボラッチョ・ボニート氏は、はたと頭を抱えてしまったのである。

メキシコの新聞等に頻繁に登場する、世界遺産登録地区や比較的有名な地域の、次の地名はどう読むのだろうか。Oaxaca, Uxmal, Xochimilco, Xochicalco, Xalapa 順番に、オアハカ、ウシュマル、ソチミルコ、ソチカルコ、ハラパと読み、特に最初と最後に上げた地名など完全に頭がこんがらかってくる。

ちなみに思いつくまま、**X**を含んだ、メキシコ市周辺の地域をあげると、Atlixca, Mixquiahula, Ixtapalca, Texcoco, Xoconoxtle, Xonacatián, etc. もう止めておこう。

これを続けると、それこそタイトルのような結果になってしまうし退屈だ。大体は原則論に近いと思うし、知る人ぞ知ることなのだろうが、正確に読む自信が無いし、Xの悲劇などと書くとその土地の人に叱られそうだ。オットット身近に有りすぎて忘れてしまいそうなものがあつた！

肝心のメキシコの国名自体が、「**México**」とXがはいっていて、「メヒコ」と発音し見事に？原則から外れている。**Méjico**(メジコではない)も辞書に載っており、この「**ji**」を発音記号で書くと、「**xi**」と書くから、もう完全に頭はショート状態である。

この国名のなかの**J**か**X**かは過去に、メキシコ国内でも長い間論議されて、政府が正式に**X**の方だときめ

た経緯があるそうである。

トルテカ、チチメカ、アステカと紀元6世紀頃から続いてきた、メキシコ古典期文化時代の、地名の影響を受けていると思われるのだが、周囲の若い人たちに聞いても分からなかった。小説の方は殺人事件だが、こちらのほうは文明の消滅と言う、文字通りの悲劇である。

日本国を、「ニホン」か「ニッポン」なのかで論議されたように、固有名詞、特に地名の読み方は難しいものがある。昔からあった地名を、合併や再開発などで、新地名にするとき、歴史的観点を重視するか、現在流に改定するかで、日本でも意見が各地で多々あったように、悩ましい問題である。

さらに、地球上に現存する国名を戦前のように、漢字で書かれたらもっと分かりにくい。

では、ある国を漢字表記すると次のようになる。どこの国だろうか(西班牙、墨西哥、葡萄牙、伯刺西爾、英吉利、埃及) (答えは下記) これらの国名をカタカナでコンピュータに打ち込むと、何番目かにこれらの字が出てくるので、何かで使う場合も有るのだろう。漢字で書かれても、字面から判断できる国名もあるが、取るに足らないことでも門外漢には難しい。

ボランティア活動終了後の余後を、歴史と地名の言われを求めて、各地を訪ねる楽しみも出ようと言うものだ。今でも悩んでいるスペイン語に関して言えば、まだ若かりし髪の毛も豊富にあったころ、業務命令による海外勤務という、他動的要素でやむを得ず、辞書と文法書を頼りに、ほとんど独学で習った外国語だった。

技術系の出身ゆえ、スペイン語の「ス」の字の素養の無いまま、スタートしたのだが、しかしその苦労が、現時点で法定年齢年齢を越え、よぼよぼの老人になるまで、ボランティア活動に少しばかり役立たせることが出来たり、新聞を読むと、「Xの悲劇」どころか、Xの発音にまで関心がおよぶと思うと、表題に込められた、「骨折り損のくたびれもうけ」がすべてではないと、人生の流転の不思議さに、テキーラをチビリチビリとなめながら、感慨に耽っているのである。

(2009年6月17日)



ある日の新聞のイラストから借用した(本稿とは関係ない記事であったが、何となくタイトルを連想させる)

(答え)

スペイン、メキシコ、ポルトガル、フランス、イギリス、エジプト